シーワールドのアニマル達

●シイラ

シイラは、世界中の暖かい海に広くすんでいて、日本近海では黒潮海流にのって初夏から晩秋にかけて見ることができます。トロピカルアイランド「無限の海」水槽のシイラは、雄特有のおでこが張りだした特異な体形と金属光沢のある美しさでひときわ目を引きます。通常、シイラの体色は背側は青緑色、腹側は銀色ですが、エサを追うなど興奮したときには鮮やかな金色となります。展示中のシイラは、搬入時全長50cm、体重700gほどでしたが、1年後には全長1.4m、体重20kgにまで成長しました。シイラは長期飼育のむずかしい魚で、その理由のひとつに活発な遊泳が災いする事故があげられます。エサを捕るときや仲間同士の闘争のときなど、興奮したシイラはジャンプすることがしばしば見られるため、シイラのいる「無限の海」では閉館作業として、飼育担当者が水槽周囲35mに高さ50cmの飛び出し防止用ネットを取り付けるのが日課となっています。飼育苦労の多いシイラですが、今では水槽にも慣れ、産卵も見られ周年飼育確立の感触も感じられるようになりました。ゲームフィッシングの好対象魚としても有名なシイラは一般にもよく知られていて、水槽の前では「シイラ」、「ドルフィン」(英名)、「マヒマヒ」(ハワイ語)などの言葉がよく聞かれます。

(齋藤)

▲シイラ *Coryphaena hippurus*

●ラッコ

ラッコは千島列島、アリューシャン列島、アラスカ、そして寒流の流れるアメリカ西海岸に分布しています。皮下脂肪がないラッコは、体重の4分の1もの量の餌を食べエネルギーを蓄え、密生する保温にすぐれた毛皮で寒さから身を守っています。

ポーラーアドベンチャーの「ラッコの海」は、気温や水温をラッコの生活環境に合わせているばかりでなく、同じ地域に住む海鳥のエトピリカや、ホッケ、クロソイなどの魚類が同居し、海藻も茂っています。ここでは、2頭のラッコ(オスの「ラッピー」とメスの「モン」)が生活していますが、 3月14日によみうりランド海水水族館生まれの2歳のラッコ、愛称「ベル」(メス)が加わりました。ラッコは環境の変化に敏感なため、私たち係員は不安で一杯でしたが、そんな心配をよそに、同居するエトピリカやサカナ、海藻などの新しい環境にもすっかり慣れ、よく食べよく遊んでいます。 また、今まで食べていなかった貝殻付の貝を与えると、最初はもう一頭のメス「モン」に割ってもらい食べていましたが、今では誰の力も借りずに自分で割ることが出来るようになりました。

ラッコは大人になると頭部の毛が銀色に変化しますが、このラッコは頭の毛がまだ黒く、幼い時の特徴が残っていて、お嫁さんになるにはもう少し時間がかかりそうですが、いつしか立派なお母さんになるよう期待しています。 (小林タ)

▲ラッコ *Enhydra lutris* 「モン」(左)と新入ラッコ「ベル」(右)

さかまた No.57 (禁無断転載)
編集・発行 鴨川シーワールド
〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464-18
☎(0470)92-2121
発行日 平成13年7月
http://www.mitsuikanko.co.jp

さかまた

鴨川シーワールド NO. 57

子ガメが海に旅立つ人工ビーチ

「海亀の浜」オープン

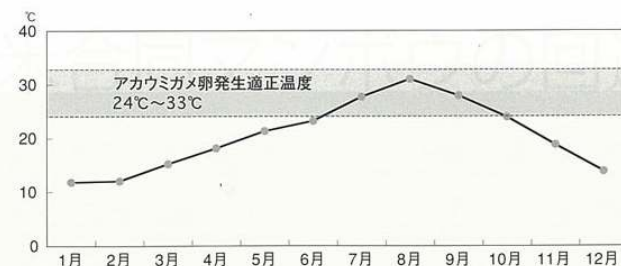
▲「海亀の浜」全景

平成13年の春に待望のウミガメ展示施設、「海亀の浜」がオープンしました。太平洋を一望する美しい砂浜、東条海岸を背景に建設された「海亀の浜」は、アカウミガメの繁殖を目的とした施設です。当館では1970年のオープン以来、ウミガメ飼育を続けてきましたが、旧ウミガメ展示水槽ではかなえられない夢がありました。それは成長したアカウミガメが砂浜にあがって産卵し、ふ化した子ガメが自らの力で海へ旅立つことです。

日本ではアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの３種類のウミガメが産卵のために砂浜に上陸しますが、中でもアカウミガメは、最も北寄りで産卵し、千葉県は毎年アカウミガメの産卵が見られる北限として知られています。鴨川シーワールドの前の砂浜でも、6月～8月にアカウミガメが産卵にやってきます。産卵は通常夜間におこなわれ、砂浜に上陸した母ガメは深さ50cmほどの穴を掘り、ピンポン玉のような卵を100個ほど穴に産み落とします。そして産卵が終わると穴をきれいに埋め戻して海に帰って行きます。卵は砂の中で50日～80日の間、夏の日差しで暖められ、生まれた子ガメは自力で砂から這い出して海へ向かいます。ウミガメはこのような繁殖生態をもつ生物なので、「海亀の浜」建設計画は、文字どおり砂浜の検討から開始されました。

以前より東条海岸（前原海岸）でのアカウミガメの産卵はよく知られていましたが、ふ化の状態については詳しく分かっていませんでした。そこで、

▲前原海岸で産卵中のアカウミガメ（平成６年７月16日）

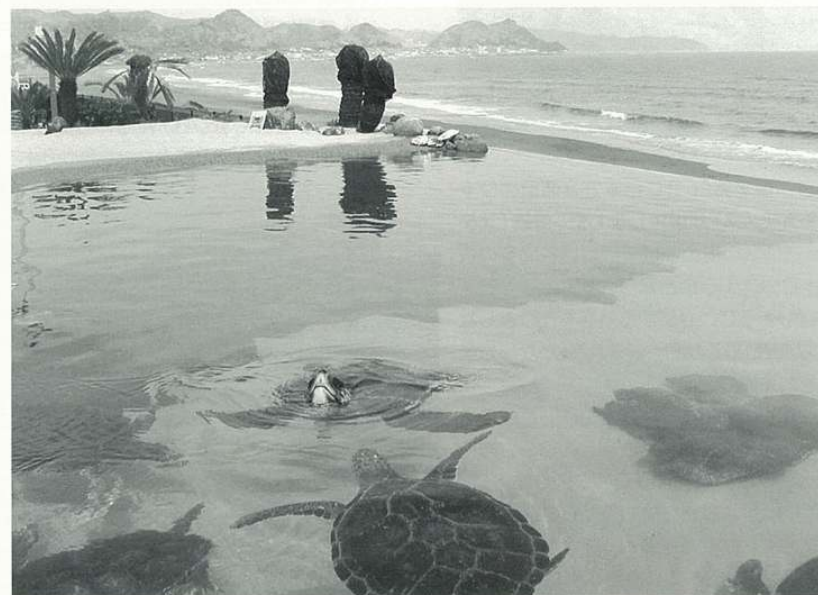
▲産卵を終えて海へ…

東条海岸の平均砂中温度（深さ50cm）

平成9年～平成11年

東条海岸の夏の砂中温度が卵の発生に適切な24℃～33℃であるのかどうかを調べてみました。平成9年より3年間にわたり深さ50cmの砂中の温度を毎日測定した結果、6月から9月の平均温度が24℃～31℃で卵発生に適した温度であることが分かりました。検討を重ねた結果、この春ついに産卵海浜を有する「海亀の浜」（砂浜面積100㎡、プール面積50㎡、水深1.2m）が完成しました。

「海亀の浜」が一般公開され、以外にもその人気の高さに驚かされました。ユニークな姿やゆったりした動作、昔話や童話にもたびたび登場し、ウミガメが日本人にとってなじみ深いこともあるのでしょう。しかし、ウミガメ人気はそれだけではないようです。造波装置で静かに揺らぐ水面と、太平洋の波とが重なって見えるように工夫した水そうは、今にもウミガメたちが、向こうの海に泳ぎだしそうな景観をつくり出し、広い人工ビーチとあいまって、言わずとも多くの観客は「海への入口」と「ウミガメの繁殖」とを連想されているのでしょう。

とても親しみを感じるウミガメたちですが、その長命のせいか、彼らの成長、寿命、生まれた砂浜に再び帰って来るのかどうかなど、ウミガメの生態についてはいまだ解明されていないことが多くあります。近い将来この「海亀の浜」で生まれた子ガメたちが海に旅立ち、その後、この美しい東条海岸へ産卵に帰って来ることを期待しています。しかし、のんびりしたカメのことです。10年～20年単位の永いお付き合いがこれから続くことでしょう。

（岡田、中坪）

▲アカウミガメ *Caretta caretta* とアオウミガメ *Chelonia mydas*

トピックス

シャチのステラが2度目の出産

名前はララ

▲生後３週間目

▲パフォーマンス中ステラとトレーナーについて泳ぐ（生後１カ月）

２月８日午前７時25分に日本で２頭目のシャチの赤ちゃん（メス）が誕生しました。母親「ステラ」にとっては３年前のラビーに続いて２度の快挙です。今回のステラの出産は、出産の途中で浮いて休んでしまうなど心配する場面もありましたが、尾ビレが出始めてから４時間37分かかって無事に出産を終えました。

赤ちゃんはすぐに自分で泳ぎ初めましたがステラは赤ちゃんに全く関心を示さずその日の夕方になってやっと一緒に泳ぐようになりました。 ところが、赤ちゃんはお乳を飲もうとしてステラの体のあちこちに吸い付きますが、なかなか乳首を探りあてることが出来ず、「今日こそは」と24時間体制で見守るトレーナーをやきもきさせました。生まれて４日後に初めての授乳があり、６日後にはゴクゴクとお乳を飲む姿が見られるようになり私たちをほっとさせました。

生後100日を過ぎ、体長2.5mに成長した赤ちゃんは、ステラから離れてラビーと一緒にジャンプをしたり、ガラス面から外の世界をのぞいたりとおてんばぶりを発揮しています。名前は、皆様から寄せられた36,417件もの応募の中から「ララ」(Lara) に決まりました。これからもララとラビーの成長を見守ってください。

（奥田）

▲すっかり大きくなったララ（左／生後３カ月）

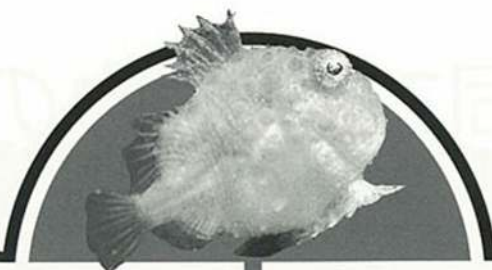
日米合同マンボウの回遊調査

▲船上で、標識を取り付ける

毎年、冬から春にかけて房総沖へマンボウが回遊してきますが、詳しい生態についてはよく解っていません。当館は開館以来マンボウ飼育を行っていますが、この度、アメリカのモントレーベイ水族館よりマンボウの回遊調査の協力依頼がありました。マンボウの背中に標識（サテライト・タグ）を取り付けて再び海へ放流し、標識からの信号を人工衛星でキャッチして、マンボウの行動を調べる試みです。鴨川市漁業協同組合の全面的支援により4月17日、18日に定置網で捕獲された2尾と当館で飼育中の1尾、合計３尾のマンボウ（体長87～112cm）に標識を取り付けて鴨川沖10kmの地点に無事放流しました。標識は、放流後６ヶ月から１年でマンボウの体から外れて海面に浮上し、その間に記録された情報（位置、水深、水温）を人工衛星を介してアメリカ・カリフォルニア州の地上局へ送信してきます。私たちは人工衛星を通してマンボウから送られてくるメッセージを心待ちにしています。

（森）

▲海に放流される標識をつけたマンボウ

▲配布されたポスター

●冬季限定、オウサマペンギンの園内散歩

オウサマペンギンは、普段冷房の完備されたポーラーアドベンチャーでガラス越しにご覧いただいていますが、気温の低い2月から3月にかけて冬季限定で一日一回の園内散歩を行ないました。お客さん達は、突然のペンギンの訪問にビックリされていましたが、間近に見るオウサマペンギンに大喜びで写真を撮ったり、一緒に散歩をしたりと笑顔がたえませんでした。ペンギンたちは、飼育舎から園内までの道のりや屋外の見慣れぬ風景に始めは少しとまどってキョロキョロしていましたが、日が経つにつれて歩く姿もどことなく誇らしげ？に見えるようになりました。

（平野）

●特別展示、「シャチのいる海、バンクーバーの自然」

平成12年12月より開園30周年の特別記念展示として「シャチのいる海、バンクーバーの自然」を開催しました。当館はオープン以来、シャチやベルーガをはじめとする海の生き物をとおしてカナダとの関わりが深いことから、飼育技術交流で親交のあるバンクーバー水族館とカナダ観光局等の協力を得て、ジョンストン海峡のシャチ情報や、美しいバンクーバーの自然などを紹介し、バンクーバー水族館生まれのイボダンゴなどカナダ産魚類、無脊椎動物40種200点を展示しました。大きく美しいイソギンチャクや小さくて丸いイボダンゴを前に「うわーきれい」「かわいい」などの歓声があがっていました。

（ハツ木）

●送迎バスデザイン一新

4月28日、鴨川シーワールドの無料送迎バスのデザインが一新されました。バスのデザインは、一般公募により募集された100件を超す作品の中から、「スーパージェッター」や「風のフジ丸」などの作品でおなじみの漫画家久松文雄先生を審査委員長とし、厳選なる審査の結果、13点の作品を合成したデザインがバスの左側面に描かれました。また、バスの右側面と前部、後部には久松先生によるオリジナル作品が描かれ、大変楽しく夢のあるバスが完成しました。「GOGO号」と名付けられたこのバスは、鴨川シーワールドとJR安房鴨川駅の間を走っていますのでどうぞご利用下さい。

（桐畑）

●トロピカルアイランドで宿泊体験

3月28日、鴨川シーワールド・オフィシャルメンバーズクラブ「ドルフィンドリームクラブ」の春休みの特別催し物として、昨年7月にオープンしたトロピカルアイランドにおいての宿泊体験が実施されました。　当日は、会員の親子20名が参加し、トロピカルアイランドの裏方見学、シャチについてトレーナーからのレクチャー、夜の水族館探検などの楽しい一夜を過ごした後、トロピカルアイランドの「無限の海」の大水槽前に、それぞれ持参した寝袋を広げ悠然と泳ぐマダラトビエイやシイラ、群泳するクマザサハナムロを見上げながら眠りにつきました。

これからも会員へのサービスをどうぞご活用下さい。

（荒木）